（2020年3月11日(水) 15時～17時30分にオンラインで実施）

始めさせていただきます。皆様よろしくお願いしますOECDの教育スキル局でこのEducation2030プロジェクトのアナリストをしております鈴木と申します。今日はまずは皆様にEducation2030とはどのような事業なんだろうか、という事を皆様に簡単にご説明させていただきたいと思います。特に先ほど司会の柄本先生からもありましたように、その中でも我々としてエージェンシーという概念がカギになると思っておりまして、そのエージェンシーについてどのように考えているのかということ、それから、我々これからフェーズ２ということで、またさらに新しい研究にチャレンジしていくということを考えておりますので、そのあたりについてもご紹介したいと思います。

OECD Education 2030 プロジェクト

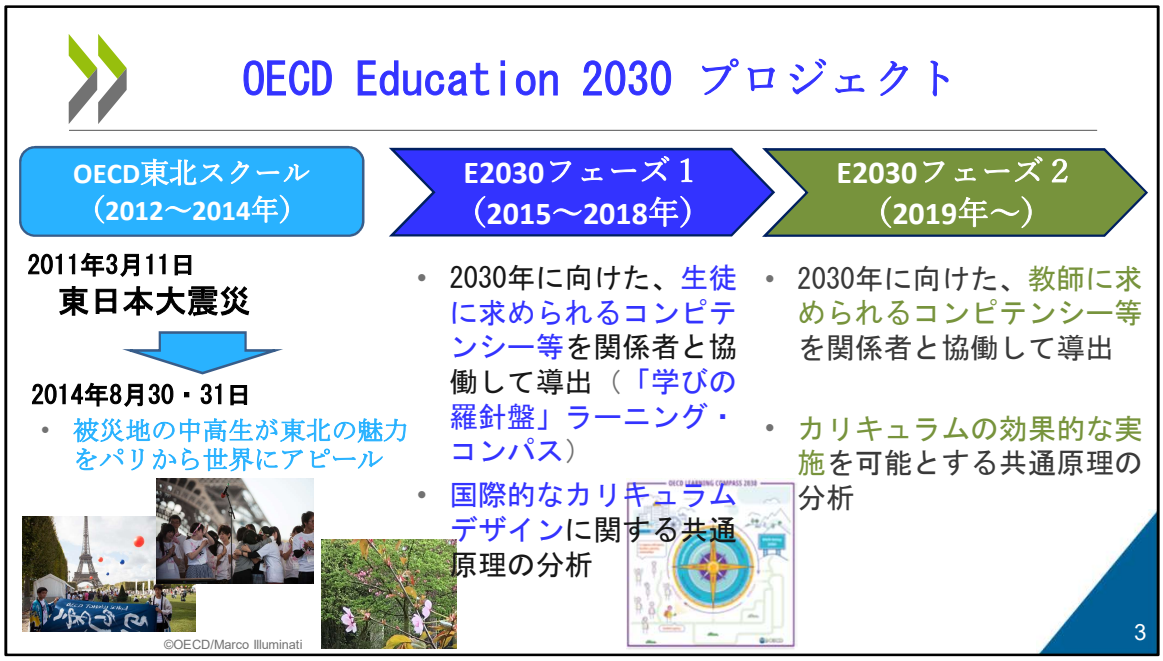
【概要】

2030 年に子供たちに求められるコンピテンシー（資質・能力）を検討するとともに、そのようなコンピテンシーの育成につながるカリキュラムや指導方法、学習評価などについて検討

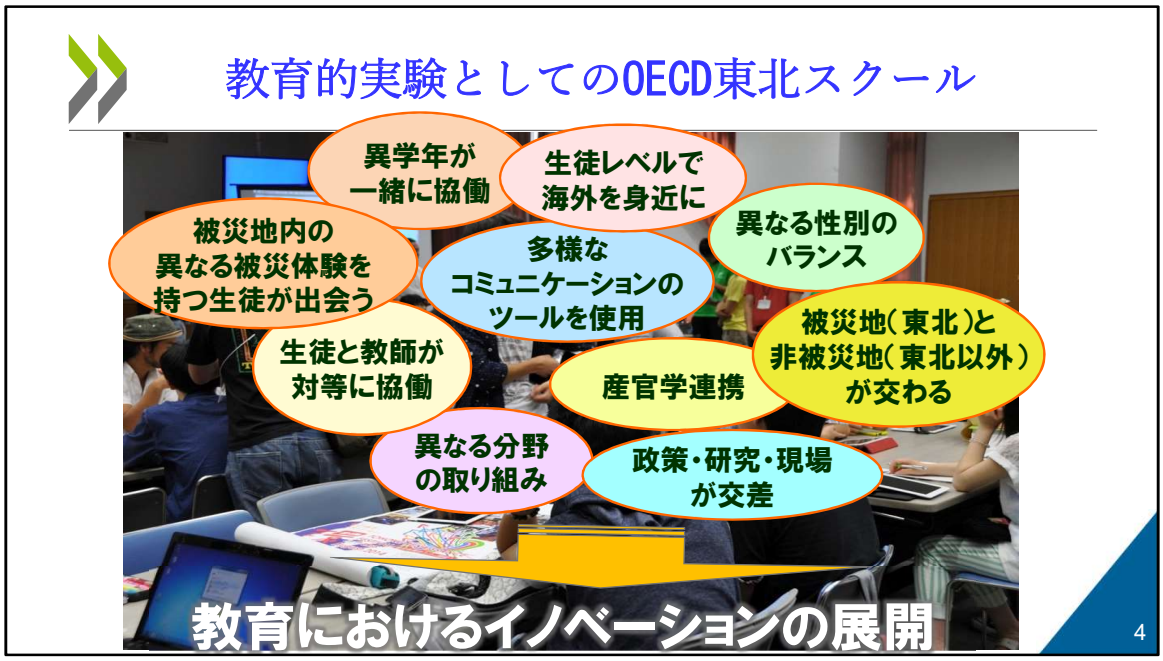
- 児童生徒が成長して、より良い未来を創造するためには、どのような知識、スキル、態度及び価値が必要なのか。
- これらの知識、スキル、態度及び価値を効果的に育成していくためには、どのような教育制度、学校や授業の仕組みが必要なのか。

2

まず最初にEducation2030プロジェクトのご紹介ですけれども、このプロジェクトは、2030年、まさに今の小学生の子どもたちが社会人になって、社会で活躍する時代に、子どもたちに求められるコンピテンシー、日本語で言うと資質・能力になると思いますけれども、どのようなコンピテンシーが必要になるのかということを検討することを目的にしています。また、そういったコンピテンシーを子どもたちに育成するためにはどのようなカリキュラムや指導方法、それから学習評価など教育上の仕組みが必要なのかということを世界の国々と一緒になって研究していくというプロジェクトです。



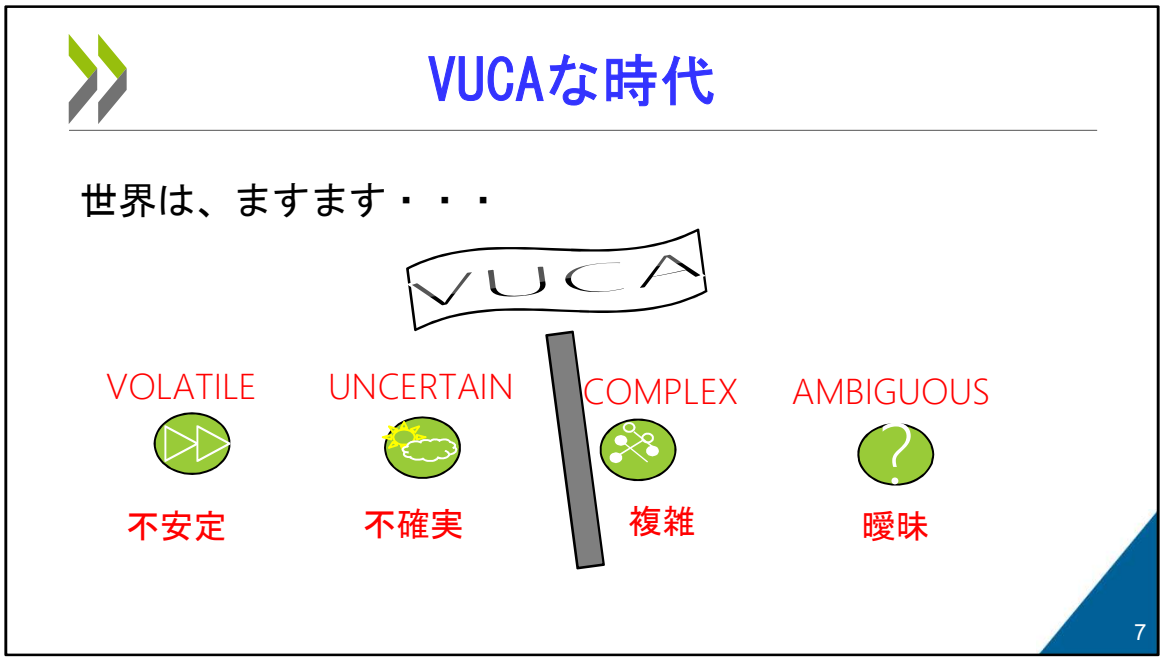
このOECDの2030プロジェクトは、その前身とも言えるOECD東北スクールで得られた知見が生かされています。これは日本の方には言うまでもありませんが、2011年3月11日、東日本大震災がありました。この東日本大震災を受けてOECDとしてどんなことができるのかということで、このOECD東北スクールが始まりました。OECDは多国間の枠組みですので、一国だけを支援するというのはなかなかないわけなのですけれども、この東北スクールでは被災地の中学生や高校生の皆さんがどういったことができるのかということを自分たちで自ら考えて、2014年の夏に東北の魅力をパリから世界に発信したいということを皆さんで考えてくれました。それを実際に行なったわけであります。東北スクールの話はまたもう少し後でお話ししますが、そういった東北スクールで得られた知見も生かしながら始まったのがこのEducation2030です。2015年から2018年までの3年間ですけれども、これを我々はフェーズ１と定めまして、まずは一つ目の課題として子どもたちに求められるコンピテンシーにはどういうものがどういうものがあるかというものを導出しようという研究を進めました。これは、2019年に公表した学びの羅針盤、ラーニング・コンパスと呼んでおりますけれども、これに結実しています。それからもう一つはフェーズ１の中で国際的にカリキュラをデザインするにあたってどういった共通原理があるのかということを分析していこうという研究もあります。これについても後ほど少し触れたいと思います。それから2019年からは、Education2030のフェーズ２ということで新たな段階に移行してきております。こちらは、2030年に向けて、子どもたちに必要なコンピテンシーを育みたいという場合に、教師にはどのようなコンピテンシーが求められるのかということを導出したいということが大きな狙いです。それからもう一つはこのようなカリキュラムを実施する段階、設計段階においてではなく、Implementationの段階において効果的にカリキュラムを実施していくためにはどういった共通原理があるのだろうか、先ほど少し触れたような学習評価の問題、それから教員養成の問題、教員研修の問題、等々ございますが、そういった共通原理を分析したいと思っています。



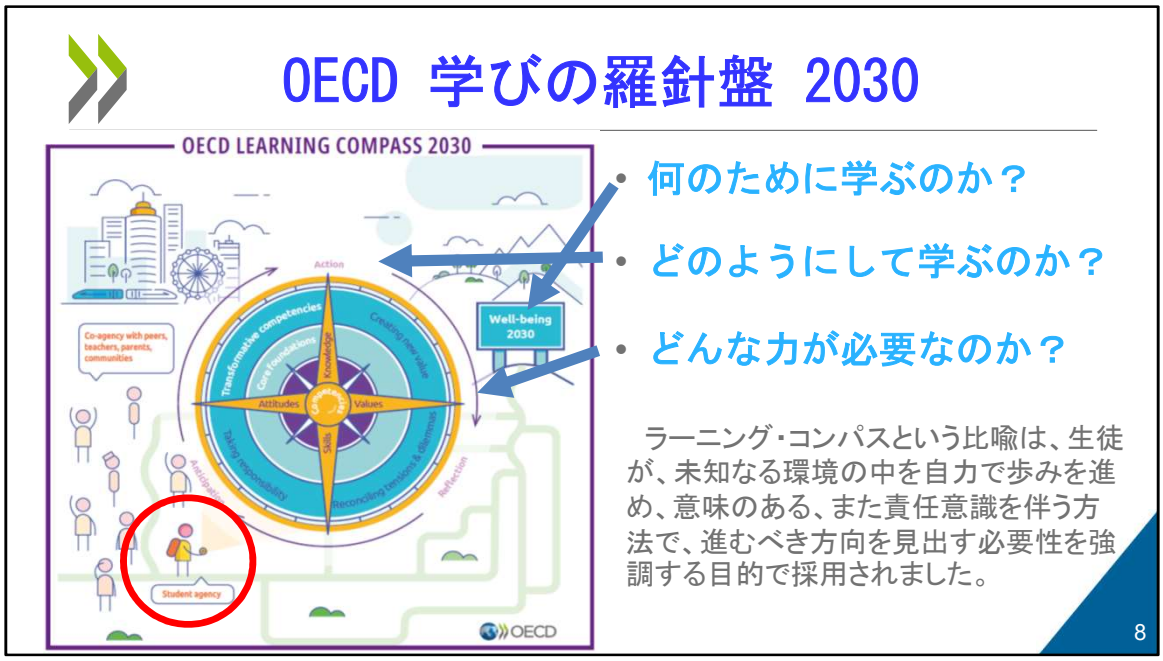
先ほど少しご紹介した東北スクールで我々が得た成果というのは何なのかについて改めて振り返りたいと思います。それはここにありますように、異なる立場の人たちが協働し、共に一緒になって新しいものを作り上げていくことの重要性です。被災地の生徒さんたちもいれば被災地ではない生徒さんたちも一緒に取り組む、日本の生徒さんもいれば海外の生徒さんも、それから異学年の生徒もいれば、先生も生徒も、もっと広がって産官学が一緒になって、つまり政策と研究と学校現場が一緒になって、これからの新しい教育、どういったことができるのかということを考えていくということのすばらしさです。ラーニング・コンパスでも出てきますが、色々な違った立場の人たちがひとつの方向に向かっていくというときにはいろんな衝突があったり対立があったりしますが、それを乗り越えていくということが重要になってきます。それがまさに教育のイノベーションを生むということが、東北スクールの中で得られた知見で、それはEducation2030の考え方の根幹につながっています。

このような全く新しいアプローチをEducation 2030プロジェクトでは取り入れております。OECDは政府間機関ですので基本的には政府代表者が集まって様々な各国の共通課題に対するソリューションを導いていくということがありますけれども、このEducation2030では政府代表者だけではなくて、今日いらしていただいている東京学芸大学の先生方もそうですし、木村先生もそうですし、こういった研究者の方々にも参加していただく、それから学校の先生にも参加いただく、教育関係のNGOや財団、企業関係者の方にも参加していただく、そして何より、竹内さんに今日来ていただいておりますが大学生や高校生のような実際に教育を受ける立場の方にも参加していただく。そういったいろいろな立場の方々に参加いただき、いろいろな立場の声を一つの研究につなげていくというのがOECDの教育スキル局としては、全く新しいアプローチをとっているというのが一つの特徴になっております。

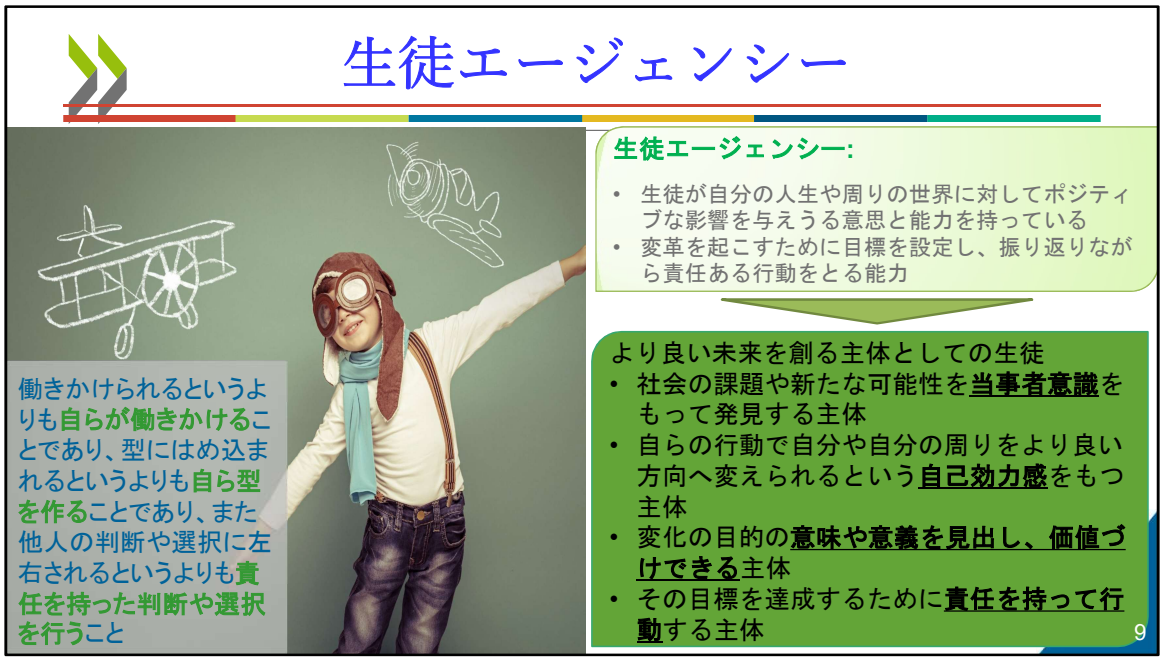
今日お話しをしたいのは、我々が昨年公表させていただいたラーニング・コンパスなのですけども、ラーニング・コンパスがなぜ生み出され、ラーニング・コンパスがどのように広がっていくことを期待しているかという点に、話を進めたいと思います。一つはまさに社会の変化、これは2006年頃、今から十数年前の社会をイメージしていただければ分かると思いますが2030年という未来を考えるときに、逆にこの十数年を振り返ってみる必要があります。2006年頃というのは当時スマートフォンが出始めTwitterですとかこういった新しいIT 技術が非常にスピードを持って登場した頃です。それから電気自動車ですとかVRですとか様々な、最近ではAIとかビッグデータなど社会の変化が非常に早くなってきているということがあります。



我々はそれをVUCAな時代と呼んでおりますが、我々が生きている時代がとても不安定で不確実で複雑、曖昧な世の中になってきている。そのスピードというものはこれからさらに進んでいくだろうという前提に立っております。我々は未来を見据えて子どもたちにどのような力が必要なのかということを考えているわけですけれども、未来を考えたときにそういったVUCAな時代になってきているというのは大きな前提になりました。

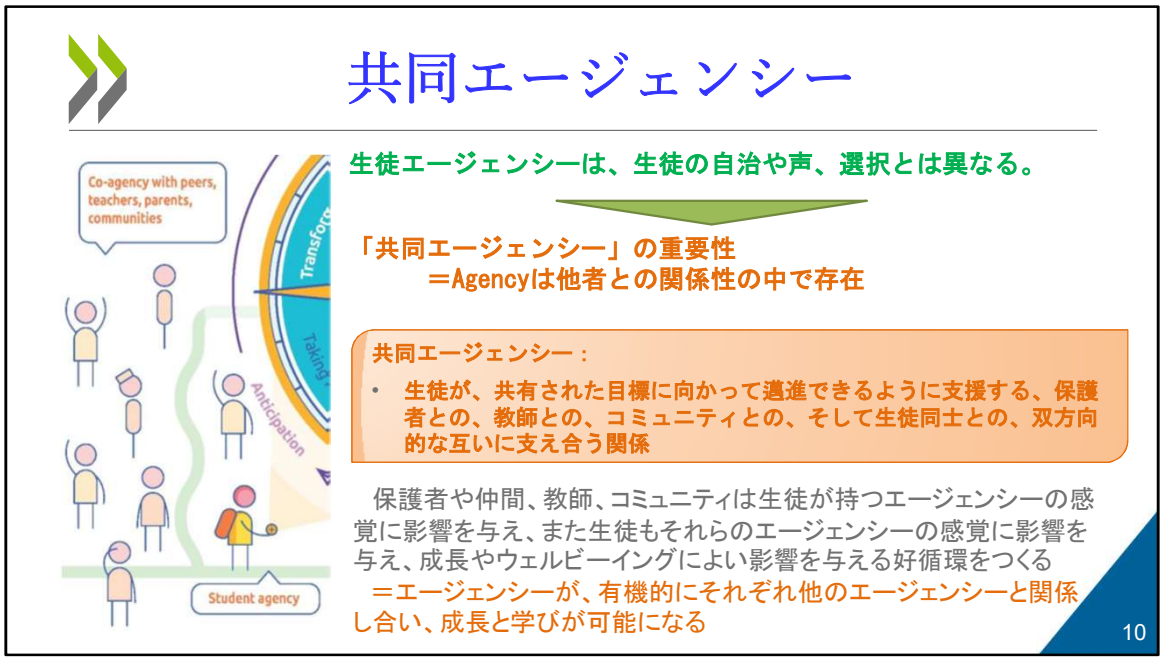


だからこそこのOECDの学びの羅針盤、ラーニング・コンパスというものは、子どもたち一人一人が羅針盤を手に、自分の力で未知なる環境の中、歩みを進めていってほしいという願いを込めてそういった比喩も込めて羅針盤、ラーニング・コンパスという名称をつけています。ラーニング・コンパスについては、何のために学ぶのかというのもこの図の中に示しております。一つは我々OECDとしてはどこへ向かって我々は学びを進めていくかというときに、ウェルビーイングを掲げています。ウェルビーイングというのはいろんな側面がありますが、個人としてのウェルビーイング、つまり自分がより良い生き方をしていくために学ぶというのもありますし、社会としてのウェルビーイング、共同としてのウェルビーイングというのもあると思っています。それからプラネットという表現を使っておりますが、まさに地球としてのウェルビーイングに向かっていく様々な環境問題ですとか、貧困の問題も含めて、戦争の問題等々、地球上には様々な課題があり、その課題の解決に向けて我々は歩みを進めていくんだという目標をウェルビーイングというところにおいています。それからどのようにして学ぶのかという意味ではAARサイクルというものを我々は提唱しています。見通しを持って実際に学びそれから振り返りを行うという学びのサイクルを回し続けるということが重要であると我々は考えています。ですのでこのラーニング・コンパスが回るような図になっています。どんな力が必要なのかということに関しては、様々なコンピテンシーがコンパスのなかに入っています。そして一番重要な概念として、赤い丸をつけた部分ですけども、エージェンシーという概念を、コンパスを手にもつ子どもたち、一人一人が発揮してほしいという願いを込めてこの図の中に記載しています。

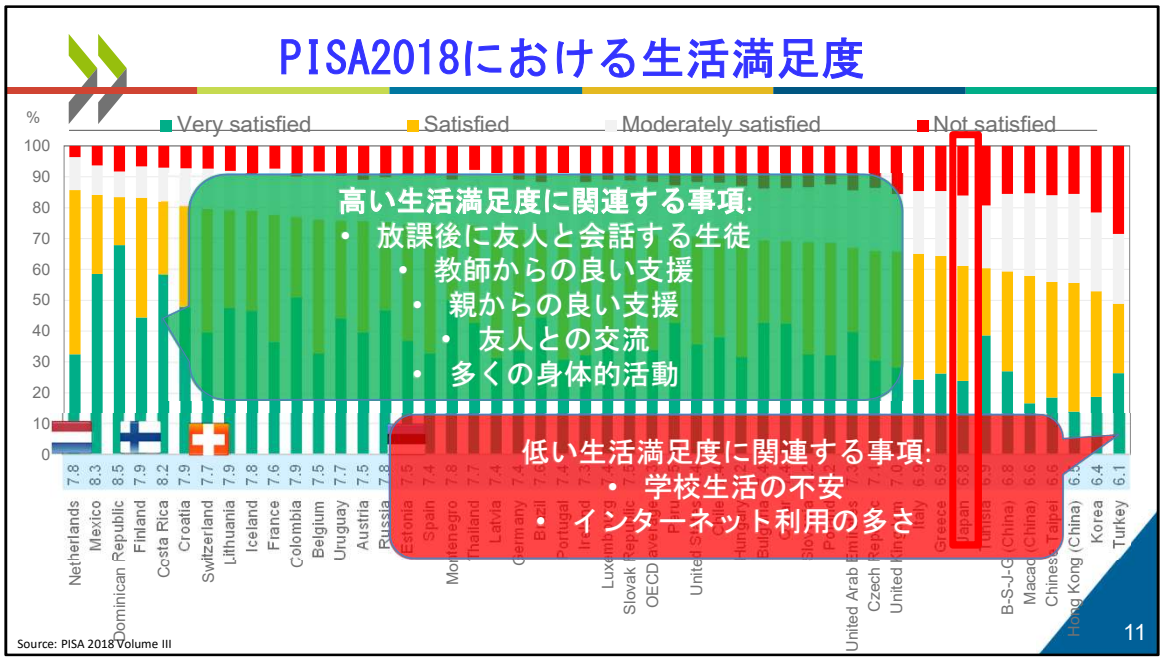


エージェンシーに話を移していきたいと思います。昨年の我々のIWG*2という会議の中でコンセプトノートという報告書を公表しています。全てOECDのホームページに載っておりますので関心がある方はそちらをご覧いただきたいと思っておりますが、そのコンセプトノートの中でも、このエージェンシーというものの重要性を記載しています。エージェンシーというのは、働きかけられるというよりも自らが働きかけること、型にはめ込まれるというよりも自ら型を作ること、そして、他人の判断や選択に左右されるということではなく、責任をもって自分自身が判断をし、選択をしていくことです。自分ひとりひとりの人生、それから周りの世界、社会に対して、ポジティブな影響を与える意志と能力を持っていること、目標を設定して振り返りながら責任ある行動をとっていくということが重要であると考えています。１つは当事者意識というのが重要ではないかと思っています。当事者意識を持つことによって、自分自身の中に何のためにやるのか、何のためにという目的意識が生まれてくると思っています。それからさらに言うと、自己効力感というものも非常に重要です。自分の行動で社会は変えられるんだという意識というのは非常に重要だと思っています。それから意義、目的を見出し、価値づけしていく主体ということで、先ほどの目的意識につながると思っています。最後はやはり、責任を持って行動をしていくということが重要になってきます。こういったような幅広い概念を我々はエージェンシーと呼んでいます。コンセプトノートの中にも記載されているように、エージェンシーについては、その受け止めや解釈が国によって異なっており、このエージェンシーという用語に直接対応する訳語を持たない言語もあり、社会や文脈によって解釈に差があります。我々として非常に重要な概念だと思っているエージェンシーというのはこういったようなことであるとご理解いただければ幸いです。

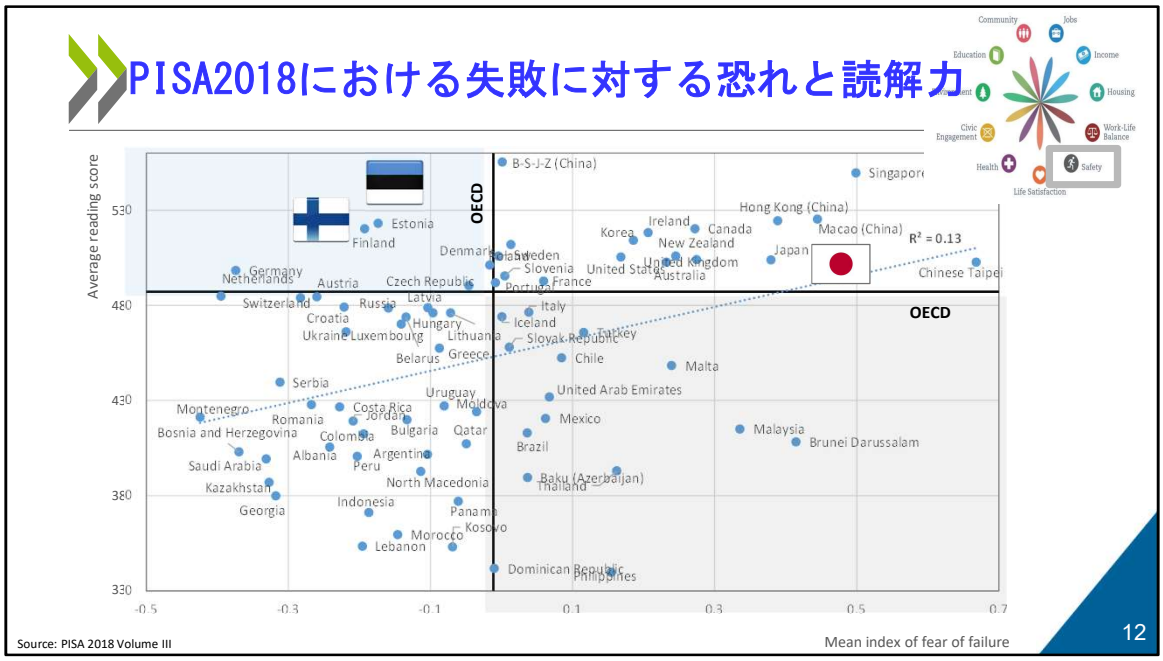
*2　Informal Working Group会議



そうなってくると、生徒エージェンシーというのが、生徒の自治だとか、生徒の声、あるいは生徒の選択というものなのかと、誤解する向きもあるかと思います。けれども、我々はそのようには考えていません。その関連で共同エージェンシー、Co-Agencyという考え方に触れますが、この概念も非常に重要になってきます。つまり、今お話ししたエージェンシーというのは単なる独りよがりではなくて、当然ですけれども他者との関係性の中で存在していますので、生徒が自ら設定した目標に向かって進んでいくためには、保護者あるいは教師の先生、コミュニティ、生徒同士の間での双方向的に互いに支えあう関係というのが、非常に重要になってきます。他の方々のエージェンシーと関係しあって人は成長し、学んでいくことができると考えています。



ここからは、少しPISAの話をご紹介したいと思っています。PISAは我々、OECDの教育スキル局で実施をしている国際的な学力調査です。日本の場合、高校１年生が対象になっており、このPISAの中で、生活満足度についても調査しています。棒グラフの赤い部分は、今の生活に満足していますか、という質問に対して、「まったくしていません」と答えた生徒さんの割合です。日本の場合、生活満足度というのが、あまり高くはなくて低いという特徴があります。逆に言うとグラフの左側にあるようなオランダとかフィンランドですとか、スイスとかこういった国々は非常に生徒さんの生活満足度が高いわけですけれども、どのようなことが背景にあるのかということを分析していくと、ここにあるような、例えば放課後に友達と会話をする頻度が多いとか、あるいは教師の先生や保護者の方々に良い支援を受けているということ、それから友人との交流ですとか、あるいは多くの身体的活動を行っている生徒というのが、生活満足度が高いことが明らかになっています。それから逆に生活満足度が低い国々に共通する状況というのが、学校生活への不安、あるいはインターネットの利用が多い国々というのが、生活満足度が低い傾向にあるということが見えてきました。



それからもう１つは、PISAの中で、「失敗に対する恐れというものがありますか」というような質問を高校生に聞いています。実は東アジアの国々というのは、ここにありますように、この図でいうところの右側の上の方にあるのがシンガポールですとか香港、マカオ、台湾、それから日本もそのカテゴリーに入っていますけれども、失敗に対する恐れを強く感じている生徒さんが多い。他方で、フィンランドやエストニアというこの図の左上に位置している国々というのは、これはPISAの2018ですので、読解力がメインエリアでしたので、読解力の平均得点との相関を見ていますけれども、フィンランドやエストニアという国々では読解力も高いけれども、生徒さんは失敗に対する恐れをそれほど抱いていないという状況があります。この２つのデータから何が言いたいのかというと、やはり各国の文脈の中でエージェンシーを捉えていただく必要があると思っていまして、日本の場合、エージェンシーを１人１人の生徒さんが発揮していくことにより、こういったような生活満足度あるいは失敗に対する恐れというようなことを改善や克服していく、その一つのカギになるのではないかと思っております。

OECD 学びの羅針盤 2030

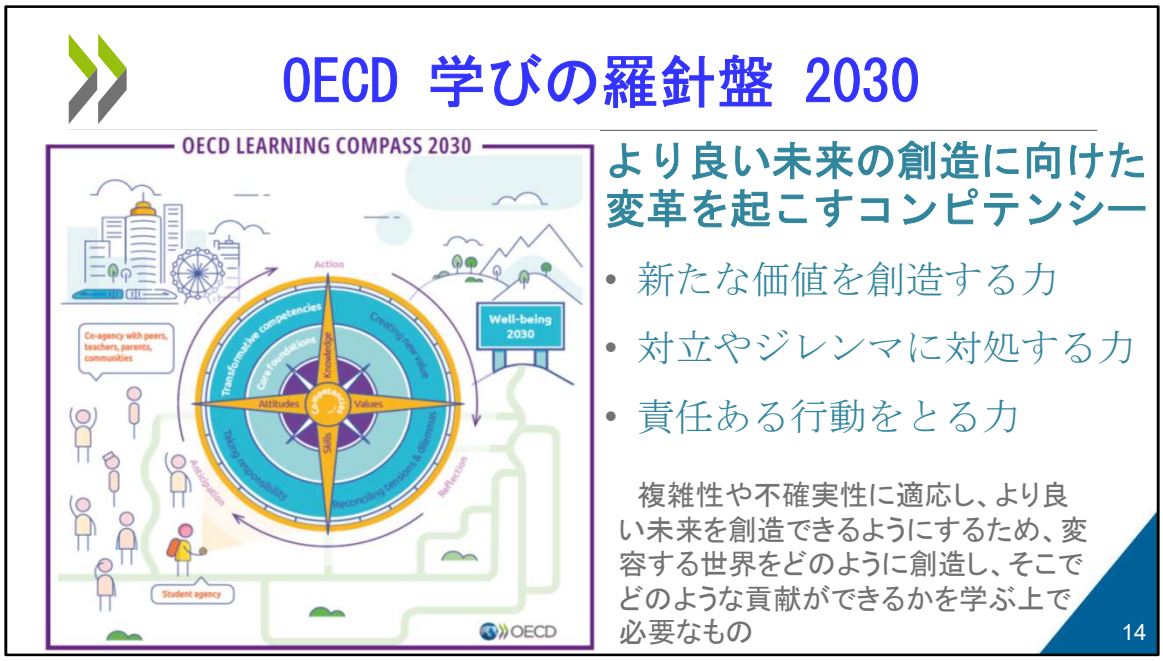
コンピテンシー

- 知識
- スキル
- 態度と価値

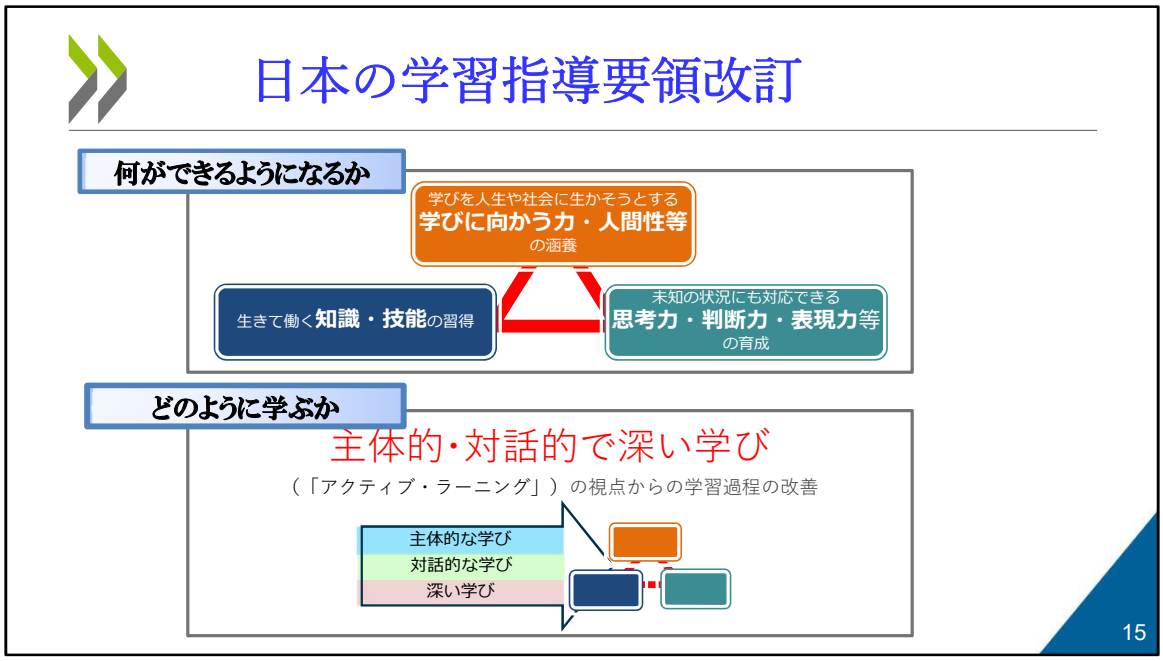
エージェンシーを発揮し、自らが持つ可能性を発揮できる方向へ進むために、生徒は「学びの中核的な基盤」を持っていなければならない。

13

さて、ラーニング・コンパスに話を戻しますが、我々コンピテンシーについては3つの柱を置いています。それは知識、スキル、態度と価値です。また、ラーニング・コンパスの中にCore foundationと記載してありますが、学びの中核的な基盤というものがエージェンシーを発揮するために重要になってくると位置付けています。



さらに、その外円にあるのが、Transformative competencyと言っていますけれども、よりよい未来の創造に向けた変革を起こすコンピテンシーが、これからますます重要になってくると考えています。新たな価値を創造する力、対立やジレンマに対処する力、そして責任ある行動をとる力を我々コンパスの中に位置付けています。つまり、まさに先ほど申し上げたVUCAな時代の中で、よりよい未来を創造するためにこのようなコンピテンシーが必要ではないかととらえています。



さて、こういったお話をさせていただくと、日本の先生方の中には、今まさに新しい学習指導要領が、この4月から小学校では全面実施に入ろうとしていますけれども、そのような中いろいろ大変ではないかという感想をお持ちの方こともいらっしゃるかもしれませんが、実はEducation2030 projectというのは日本の学習指導要領の改訂とまさに同じ方向性をもって進んでいるというのがご理解いただけると思っています。先ほどのコンピテンシーの3つの柱というのは学習指導要領のまさに3つの柱に対応しておりますし、それからどのように学ぶのかという部分でも、先ほどのエージェンシーの話は主体的、対話的で深い学びの部分につながっています。何か新しい学習指導要領とは全く違う方向性の授業をしなければならないということではなくて、まさに学習指導要領を改訂するにあたってOECDのこういった研究と日本の教育政策がリンクしていると御理解いただければありがたいと思います。

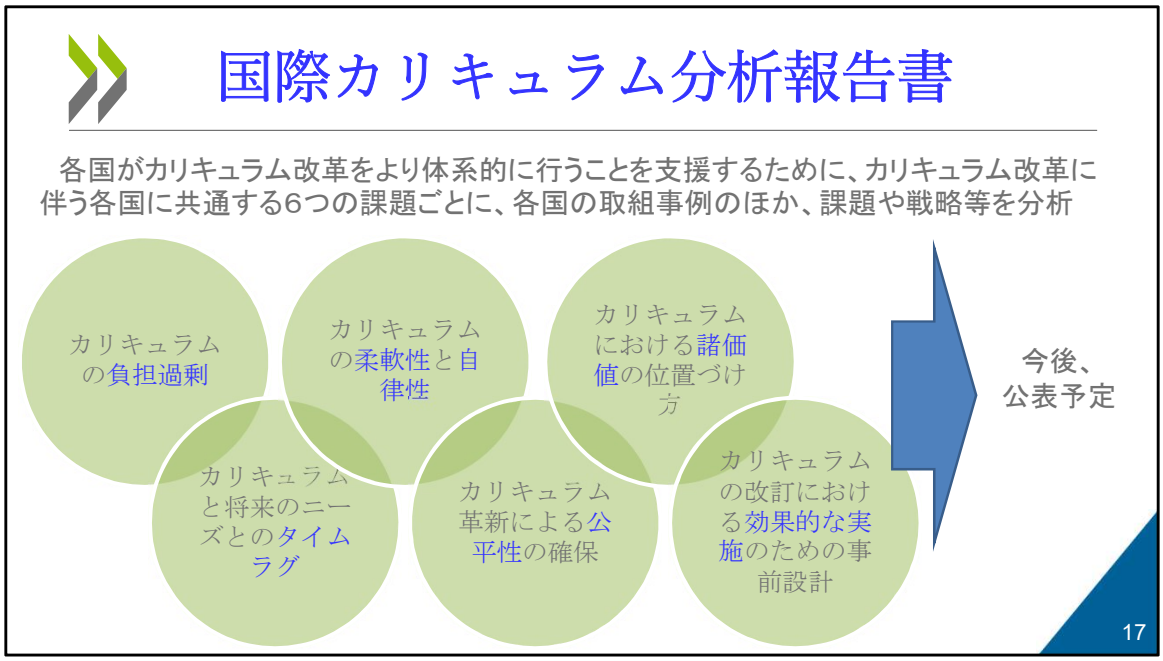
フェーズ２におけるOECDの取組

５つのテーマ別ワーキンググループ

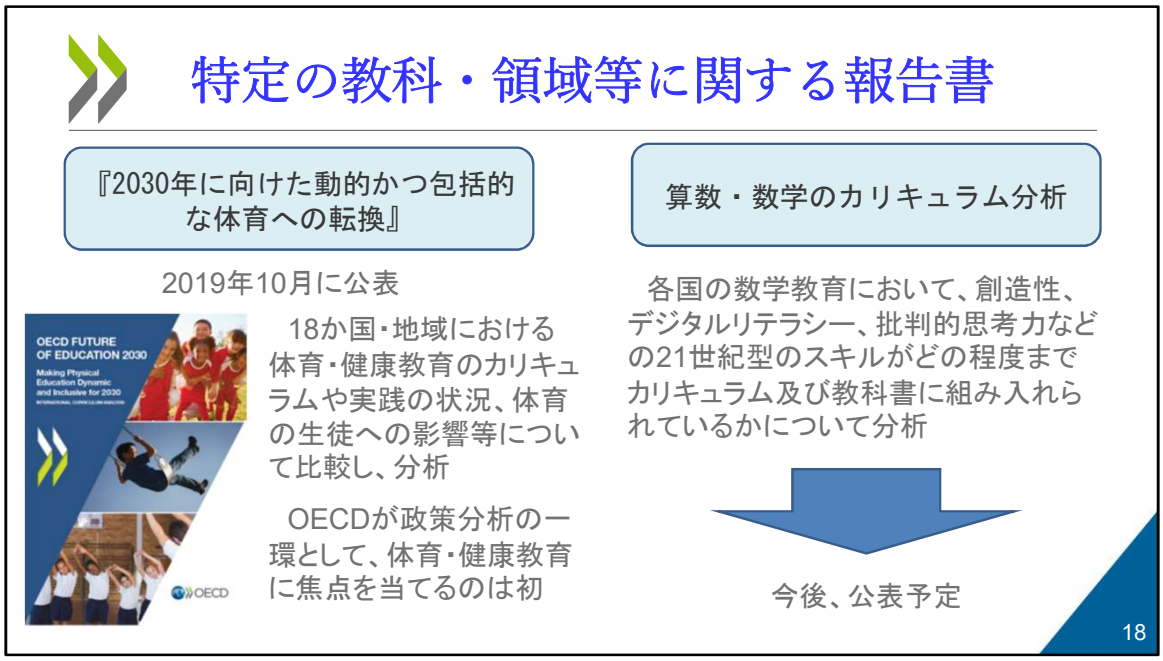
1. カリキュラムの実施のための、教師エージェンシーや教師に求められるコンピテンシー等
2. カリキュラム改革と指導法や学習評価の改革との連携
3. カリキュラム改革と教員養成課程や教員研修の改革との連携
4. 実験的取組を進める学校
5. ラーニング・コンパスの理解促進

16

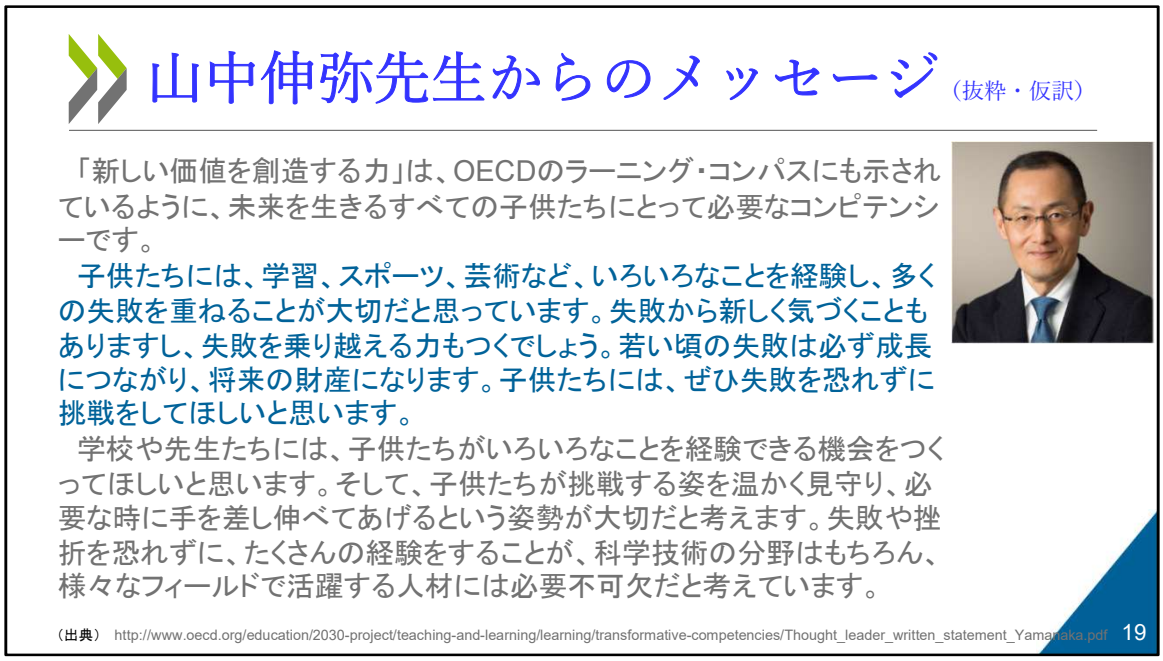
次に、これからフェーズ２で我々がどういうことに取り組んでいこうとしているのかについてお話したいと思います。これからテーマ別に５つのワーキンググループを立ち上げることとしております。１つは先ほど申し上げた教師のエージェンシー、あるいは教師に求められるコンピテンシーを導出していきたいと考えています。さらに、カリキュラムの効果的な実施に向けてのカリキュラム改革と指導法や学習評価の改革との連携、また、教員養成や教員研修の改革との連携などが今後さらに検討を深めるべきテーマであると考えています。後ほど、木村先生からお話があると思いますが、こういった観点について、ぜひ日本の優れた取組を世界に発信していただきたいと思っています。



次に、我々が今後公表予定の国際カリキュラム分析報告書についてご紹介します。世界の各国がカリキュラム改革をより体系的に行うことを支援するために、カリキュラム改革に伴う各国に共通する６つの課題ごとに、各国の取り組み事例や戦略等を分析することとしております。テーマはここにあるような６つを考えております。公表されましたら、ぜひご覧いただければと思います。



次も、我々のEducation2030プロジェクトが取り組んでいる取組のご紹介です。我々は、特定の教科・領域等に関する報告書というのも公表させていただいており、昨年の10月にはOECDとして初めて、体育・健康教育に焦点を当てた報告書を公表しましたし、今後は算数・数学に焦点を当てたカリキュラム分析の報告書を公表する予定としております。



終わりになりましたけれども、最後に、ノーベル賞受賞者でいらっしゃる、京都大学の山中伸弥先生から、我々のラーニング・コンパスに、メッセージをいただいています。子どもたちには、いろいろな経験をし、多くの失敗を重ねることが大切であるということ、若い頃の失敗は必ず成長につながって将来の財産になるので、ぜひ失敗を恐れずに挑戦してほしい、というメッセージをいただいています。また学校の先生には、ぜひ子どもたちが挑戦する姿を温かく見守って、必要な時には手を差し伸べてあげていただきたいということをメッセージとしていただいていますので、最後にご紹介させていただきました。
私の説明は以上になります。ありがとうございました。

（柄本）
ありがとうございました。OECDによる国際的な枠組みと日本との方向性との一致についての大変興味深いお話、ありがとうございます。
それでは続きまして、木村優先生にお話しいただきたいと思います。木村先生はISN*3 1.0に2015年から関わられまして福井クラスターをサポートされてきました。先ほどの鈴木様のお話にもありましたが、IWGという国際会議にも第８回から継続して、日本代表の一員としてご参加されています。それでは、木村先生、ご発表をお願いいたします。

*3　日本イノベーション教育ネットワーク（協力OECD)